

## 様式 C-7-1

## 平成24年度科学研究費助成事業（科学研究費補助金）実績報告書（研究実績報告書）

1. 機関番号	3   2   6   0   4	2. 研究機関名	大妻女子大学																									
3. 研究種目名	基盤研究(A)																											
4. 補助事業期間	平成23年度～平成26年度																											
5. 課題番号	2   3   2   4   0   0   9   8																											
6. 研究課題	アジア採集狩猟民児童～大都市児童の発育発達多様性と環境の相互作用、含む標準値作製																											
7. 研究代表者	<table border="1"> <tr> <th>研究者番号</th> <th>研究代表者名</th> <th>所属部局名</th> <th>職名</th> </tr> <tr> <td>5   0   1   1   4   0   4   6</td> <td>オオサワ セイジ ----- 大澤 清二</td> <td>人間生活文化研究所</td> <td>所長</td> </tr> </table>				研究者番号	研究代表者名	所属部局名	職名	5   0   1   1   4   0   4   6	オオサワ セイジ ----- 大澤 清二	人間生活文化研究所	所長																
研究者番号	研究代表者名	所属部局名	職名																									
5   0   1   1   4   0   4   6	オオサワ セイジ ----- 大澤 清二	人間生活文化研究所	所長																									
8. 研究分担者	<table border="1"> <thead> <tr> <th>研究者番号</th> <th>研究分担者名</th> <th>所属研究機関名・部局名</th> <th>職名</th> </tr> </thead> <tbody> <tr><td></td><td></td><td></td><td></td></tr> <tr><td></td><td></td><td></td><td></td></tr> <tr><td></td><td></td><td></td><td></td></tr> <tr><td></td><td></td><td></td><td></td></tr> <tr><td></td><td></td><td></td><td></td></tr> </tbody> </table>				研究者番号	研究分担者名	所属研究機関名・部局名	職名																				
研究者番号	研究分担者名	所属研究機関名・部局名	職名																									

## 9. 研究実績の概要

日本、タイ、ミャンマー、ネパール児童の発達の諸相を明らかにしその標準値を策定する事が本研究の最終的な目標である。発達に関してはこうした研究が従来存在しなかったので専門分野のみならず社会的な意義が非常に大きい。

○24年度上期●調査地毎に年間計画を作成し担当者間でこれを確認した。昨年度の研究結果及び進捗状況をお互いに報告した。●前年に収集した日本人児童約2,000人のデータ入力を行った。●タイ山岳地域における狩猟採集民ムラブリの発育発達追跡調査を実施した。●カレン児童(タイ)の縦断的な調査を行った。●アンダマン海上(ミャンマー外国人立ち入り禁止区域)の狩猟採集民モーケンの調査は異例の許可を州首相から得て実施するので現地政府との交渉を行い結果許可を得た。これは12年前に日本のNHKが現地に入つて以来の快挙であった。●ミャンマー都市児童調査による生活習慣と発達に伴う身体症状に関する調査結果が重要な情報を含んでいたので現地政府、大学関係者に対して報告を行つた。●ネパールのシェルバ等7民族の児童第2次調査を行つた。

○24年度下期●狩猟採集民モーケンの調査を12月に敢行した。この調査により人類学的にも貴重なデータが大量にもたらされた。その結果モーケン人の発達は極めて早熟で既に幼児期において殆どの生活上必要なスキルを身につける事が明らかになって來た。これは海上という危険な環境において生存する為の適応戦略と予想している。●対する山岳地域のムラブリは大家族に見守られながら比較的安全にゆっくりと発達するらしい。●ネパール人児童の暫定的な解析結果としてシェルバの発育発達はネパール諸民族の中では特異的であり独特の小さくすんぐりした体構となる事が分かって來た。●日本人、ネパール、モーケン、ムラブリ等諸民族児童の58項目の発達調査結果を解析して第11回日本発育発達学会で報告し理事会より高い評価を受けた。